

撤去される「被爆人形」 40年被爆伝え続け・・・

広島平和記念資料館に、原爆投下直後、全身にやけどを負った人々の人形が展示されています。これまで40年にわたって当時の凄惨な状況を伝え続けてきましたが、今年、この人形の撤去が決まりました。原爆の悲惨さをいかにして未来へと伝えていくのか、広島で取材しました。



広島平和記念資料館。毎年世界中から100万人を超える人々が訪れます。ここに人々に強い印象を残してきた展示物があります。

「お子さんから大人まで幅広い世代の方が足を止めて、じっとこの光景に見入っているという状況です」(記者)

焼けただれた皮膚で瓦礫の中をさまよう人々を再現した人形。被ばく直後の広島で、燃えさかる炎から逃げようとした人々の姿です。

「なんかちょっと怖かった」(女の子)

「悲惨な出来事だったんですね。とてもショックです」(イギリス人)

「もしこれが本物ではなくただの展示物だとしても、過去を知るために(人形を)維持していくべきです」(フランス人)

資料館では開館当初、焼け焦げた衣服をマネキンに着せて展示していました。初めて人形を使って当時の様子を再現したのは、1973年のことです。その後、当時の状況をイメージしやすくインパクトのある方法で訴えようと被爆者でもあった当時の館長が自ら監修し、現在の形となりました。その一方で、人形は原爆被害の一部を切り取ったに過ぎないといった意見も根強く、この人形は長年、議論の的になってきました。

そして今年、原爆資料館のリニューアルを機に展示方法の見直しを検討する有識者会議が行われました。そこで、人形などのつくり物よりも遺品や写真などの実物の資料を重視すべきだと判断。人形が姿を消すことが決まりました。

「一番の議論の課題になっているこの人形の撤去について、いま一度理由をお聞かせいただけますか？」(記者)

「(人形より)実物が伝える迫力は、相当なものがあると確信している。(実物で)感じ取っていただくことに重点を置きたい」(広島平和記念資料館・志賀賢治館長)

資料館は人形を撤去した上で、焼け焦げた衣服などの実物資料の展示に切り替えることを検討しています。しかし、人形撤去の方針に異論を唱える人もいます。資料館で解説のボランティアをしている、川本省三(79)さんは原爆で両親と兄弟を亡くし、原爆孤児となりました。

「実際に感じる事ができるんです。あの時被爆した人の苦しみが。私らも実際あの時の救護所の状態を見ている。少しでも真実に近い姿を知ってもらいたい」(ピースボランティア・川本省三さん)

JNNは広島市の中心部で人形の撤去の賛否について、100人に緊急アンケートを行いました。

「若い人は分からない。(人形が)なかったら、言葉だけでしょ」(人形撤去に反対・被爆者の男性)

「ちょっと衝撃でした。怖かったですね」(人形撤去に賛成・女性)

「社会見学で見て、ずっと戦争の悲惨さを感じていた。学習を受けた者としては、反対かな」(人形撤去に反対・男性)

「子どもだったら“怖い”と思ったりするけど、これから(原爆投下)をやらないように学ぶためだと思う」(人形撤去に反対・女性)

結果は9割の人が人形の撤去に反対でした。

「今の段階では、“(人形の)役目は終わった”かもしれない。これからは正確さ・トータルさ、一人一人の死者、被爆した人の悲しみも含めて伝えていくことが必要」(広島平和記念資料館・志賀賢治館長)

人形か、それとも衣服などの実物の資料か。記憶の風化が進む中、原爆の悲惨さを伝えるための模索が続いています。(06日18:05)